



No.63 2003.5

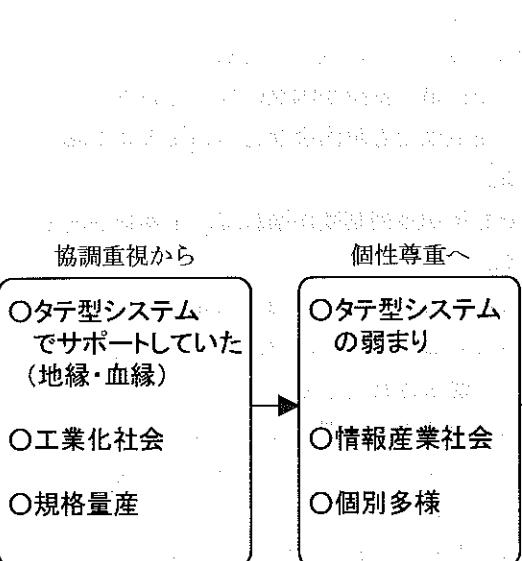
株よかネット

NETWORK

大学大変のなかで、ユーザーに期待され、生き残る大学の条件は ～学生に対する就職支援活動は、 “現代若衆宿”機能の一つかも知れない～	2
管理者の立場も考えた、公営住宅の植栽計画、管理計画	5
21世紀の大学教育は国際人材育成 ～立命館アジア太平洋大学の取り組み～	7
狭苦しい宅地開発はなぜできる	8
見・聞・食	
自分の住んでいる町を探検しよう 楽しい公園を考えよう ～玖珠町こどもわーくしょっぷ～	10
大牟田の近代化遺跡を見て回る	12
長く続けられる里山づくりを考える	15
近況	
建築家と散髪屋さんは瞬間・竣工式サービス業か ～忘れられない散髪屋さんの話～	17
沖縄で飲んだ不思議なお茶～ぶくぶく茶～	18
都市住宅学会九州支部の設立準備会が発足	19
本・BOOKS	
発想する会社！	20

●個族化社会で、どのようにして縁やつながりを求めるか

社会状況の変化



○個族の増加	
世代別の個族化率	
'90	'00
25~29歳	45% ↗ 62%
30~34歳	24% ↗ 36%
30~54歳	13% ↗ 20%
55歳以上	37% ↗ 44%
(国勢調査)	

○無業者の増加	
大学卒無業者	
'90	'02
10%	↗ 31%
大学院卒無業者	
'95	'02
15%	↗ 20%
(学校基本調査)	

○フリーターの増加	
世代別のパート・アルバイト数	
'87	'97
25~29歳	6% ↗ 9%
30~34歳	6% ↗ 9%
30~54歳	9% ↗ 12%
55歳以上	3% ↗ 6%
(就業構造基本調査)	
※2002年は未発表	

考えられる問題点

- タテ型システム(地縁・血縁)が弱くなって、社会とのつながりサポートが欠けてきている
- 家族が社会へ出していくためのしつけの場になっていない
- 高校・大学も社会へつながる(就職する)橋渡し役ができていない

- ・現代若衆宿みたいなものがあるのではないか
- ・つながりやすい場やしくみが必要なのではないか

注：「個族」とは“次の世代につながりにくい状態”（子供がない、結婚していない暮らし方など）を意味し、一人暮らし個族（単独世帯員数）と隠れた個族（2人以上世帯内の未婚者）からなる。
(個族化社会の関連記事は2ページより)

大学大変のなかで、ユーザーに期待され、生き残る大学の条件は？

——学生に対する就職支援活動は、“現代若衆宿”機能の一つかも知れない——

糸乘 貞喜

青壯年の個族化が進んでいるということを調べているなかで、就職しない大学生が増えていることに気がついた。文部省の調査データでは、フリーターは「就職しない」の方に入れられている。近年ではそれが30%を超えていて、つまり、昔のような感じの就職が減っている。平均で30%を超えていて、希望者のほとんど全員が就職する大学があることから考えると、大半の学生が就職できていない大学もあるに違いない。

この号の表紙に書いているように、「これからはヨコ型のネットワークの時代なんだ」といったような単純な問題ではない。地縁・血縁といったタテ型のシステム自体が弱くなっている。一方で、モノづくり産業から情報サービス産業へ転換しつつある時代では、個人にとって「ネットワークが強く・広い」ことが、生きていくための基盤になってきている。

とにかく大学生を、現代社会のネットワークの中へ迎え入れる重要性は、一層強まっている。

●大学卒の3割は就職しない時代

多摩大学の就職支援がすごいという話をきいて、インターネットで検索してみた。一見して、「今の大學生はこんなに学生の就職に力を入れるのか、それにしてても多摩大学はすごいな」と思った。よく考えてみると、大半の学生は学者になるためではなく、就職する（仕事をする）ために大学に来ているわけで、もし日本の人口の50%（大学進学率のこと）が学間に専念していては、国はもたない。大学が「対個人サービス業」だとすると、卒業後生きていくための就職のサポートをするのは、大学の基本サービスだとも言えよう。その点、多摩大学は学生数が少ないこともあって、キメ細かい就職指導が行われているようだ。

自分の眼で確かめないと気が済まないので、多摩大学の就職部をたずねてみた。私の関心は大学卒業後、「無職・その他」となる率が30%を超えたという中で、どうして就職する気にさせ、企業に結びつけていくのかということである。

●縁が日々薄くなっていく時代

地縁や血縁など、現代はあらゆる縁が薄くなりやすい時代である。たとえば地縁や血縁について挙げてみると、と、

①親戚づきあいは、数が減り、距離も遠くなっている。

②兄弟姉妹も人数が減って、住んでいるところも遠く離れている。

③農村集落では、世帯数や家族人数が減ったこととも関連して、昔のような集落のしきたりが保

てなくなっている。

④さらに農村集落では、現代の仕組み（工業社会、核家族）から外れたために、結婚をしない未婚青壯年が増えている。

⑤都市周辺部の集落では、在来の居住者と新規移住者の関係がうまくいかず、自治会などの集落区への加入者が減るなど、コミュニティが損なわれている。

⑥都市内でも、人口の減少と老齢化のために、祭りなどの行事の維持が困難になっている。

⑦新しい住宅地でも町内会などへの加入者が減っている。

⑧企業でも年功序列制度が壊れて、年俸制が増えている。

⑨と同時に、会社人間は評価されなくなり、タテ型の命令ではなく、自己責任で仕事を成し遂げることが要求されだしている。

縁が薄くなる中で、別に就職しなくても、食うには困らないから、フリーターでいいではないかという考え方がある。しかし、フリーターだと友人関係も安定しないし、日頃の連絡先も変わりやすいので、同級生とのつきあいも薄くなる。また就職しないと大学との縁も薄くなる。仕事が安定せず、規則だった生活をしないと家族とも縁が薄くなる。

縁が薄くなるということが、形の上での個族化をもたらし、ひいては心のつながりの孤立化に結びつきやすい。この縁がとぎれやすい学生を「つながりぐせ」の方に向けて、社会人として迎え入

表 学部卒業者の就職・進学状況の動向

大学卒業者	総数	進学者	就職者	無業者・その他
1970	240,921 100 100.0%	12,003 100 5.0%	187,691 100 77.9%	38,890 100 16.1%
1975	313,072 130 100.0%	15,240 127 4.9%	232,558 124 74.3%	62,525 161 20.0%
1980	378,666 157 100.0%	16,742 139 4.4%	285,056 152 75.3%	71,499 184 18.9%
1985	373,302 155 100.0%	21,985 183 5.9%	288,272 154 77.2%	56,054 144 15.0%
1990	400,103 166 100.0%	27,045 225 6.8%	324,164 173 81.0%	41,531 107 10.4%
1995	493,277 205 100.0%	46,316 386 9.4%	330,998 176 67.1%	109,218 281 22.1%
2000	538,683 224 100.0%	57,632 480 10.7%	300,687 160 55.8%	174,404 448 32.4%
2001	545,512 226 100.0%	58,662 489 10.8%	312,450 166 57.3%	167,772 431 30.8%
2002	547,711 227 100.0%	59,676 497 10.9%	311,471 166 56.9%	169,858 436 31.0%

資料:「学校基本調査報告書」

れようとするのが大学の就職部の仕事だと思った。

●若者に最も必要なサービス業現代若衆宿

昔の“若衆宿”的役割を分析してみると、「三つのセイ」ということが浮かんでくる。つまり、①生=生きていくための仕事の技術を身につける、②政=大人として地域社会の政(まつりごと)へ参加する知識を得る、③性=良き伴侶を得て次の世代を育てる知恵を得る、という三つである。この役割は、明治以降には、地域青年団(女子青年団もあった)が受け持ったことになっている。さらに兵役もあった。戦後は、一層の工業化の中で、地域の若衆宿が対象としたような青年男女は、都市へ出ていった。そして企業が、転職や仕事、技能、結婚の世話をまでするようになっていた。

一方で、高校・大学への進学率が高まるにつれて、昔から親や親戚、さらには地縁が受け持った転職や就職の紹介やそれへの期待が、いまでは大学へ変わってきている。以前の若衆宿の機能を受け継ぐ位置を占めている組織が、大学の就職部かもしれないとも思う。

●“一人ひとり”最後まで、若衆宿のように親身になって面倒を見る

「“一人ひとり”ってどういうことですか」とたずねたら、「常に連絡をとるということです」という返事が返ってきた。就職カードを見せてもらつたが、本人のケイタイやEメール、家族はも

ちろん「親しい学友」の氏名、住所、TEL(ケイタイも)も書き込むようになっている。

大学の就職活動が、一般的にどうなっているのか知らないが、この大学では「一人」を相手にサポートがなされている。学生全体に一般の掲示板で知らせるというようなことではダメらしい。就職部による面接も一人に対して年2回行われ、ゼミの教師からもフェイス・ツー・フェイスで指導され、連絡もケイタイに入ってくる。企業の情報も、本人の希望に合わせたものがダイレクトメールやケイタイで入ってくる。音沙汰がないと「どうなったか」と友人に電話してそちらから本人に話してもらう。

まさに「対個人サービス業」であり、小回りが利くことが勝負のようだ。「アーリー&クイック」が決め手らしい。企業情報も個人に届くし、学生も就職訪問などの動きがクイックにおこせる。「今の学生はうるさいぐらいに言われても反発なんてしまんせんよ。素直ですから」と言われたが、現在の50%進学時代は、10%しか進学しなかった時代とは違っている。

聞きながら感じたことは、現在の大学では、大多数の学生が就職までのモラトリアムであつたり、訓練の期間であるということである。とすれば、若衆宿としてきめ細かに指導し、社会へ送り出してくれる大学がニードに合っていると考えられる。

一部の学生に対しては、卒業後起業や研究で「一人立ち」するように指導することは必要であるが、「知的サービス業」を営む大学が、次へ進むためのサポートを重視するのは理にかなっているし、そうできない大学は消えていかざるを得ないのかもしれない。

現代の大学は「規格人間大量生造業」では成り立たない。「個別の知的サービス業」でなければならない。

●対個人サービス業の雰囲気

就職サービスの個人面接がどんな雰囲気で行われているのか気になったので、「どうやって学生と面接するのですか。」と質問し、「ほんの少しなら」という条件で2~3分盗み聞きをさせていただいた。

「君はどんなところに就職を考えているの」

「…………」

「わからない?何がしたい……。探しても出てこない?」

「…………」

「自動車ディーラー?車好きなの?」

「ボソボソ」

「お母さんと就職のこと、希望など話しているの?」

「ボソボソ」

「お母さんに相談してほしいんだなあ……、相談すれば考える気になりやすいだろ」

「ボソボソ」

「S Eはどうなの。数学が得意なら運輸関係の配達システムのサポートとかもあるよ。」

「…………」

「何? 家が運送関係なの?」

「別に家でもいいんだから、車のディーラーだけでなく、S Eなんかも考えてみたら……」

といった具合に進んでいった。聞きながら「これはすごい仕事だなあ」と思った。「お母さん」という言葉が出たとき、少しショックを受けた。並の気分では、このサービスはできないだろう。ひょっとすると、若衆宿でこれに似た言葉があるとすれば、「オマエの先祖は……」ということになるかもしれない。会社でもここまでやれないな、とも思った。

もちろんサービス料を払っているのは学生側で、会社では金を受け取るのが社員ではある。とはい

え、金を払っているからには働いてもらわねばならない。この就職支援サービス担当職員は、民間企業から来ている人が多い、というのもうなづける。

●「自分で決めるぐせ」をつけさせる指導

就職のガイダンスが、就職サポートのスタートであるが、そこでは具体的な就職のことではなく、①自分で決める、②現実逃避するな、③ホーレンサー（報告、連絡、相談）をおこたるな、④企業の仕事というものは現物主義だ、ということを徹底的に話す。

現代は食うに困らない時代であるために、仕事の中での自己責任ということを考えずに、「それなりに」やってれば職をもらえるという、パート的な気分の学生が多い。それに対して、この大学ではカリキュラムの中でも「自己発見講座」が徹底して行われている。

それは、12~13週まで続くが、第2週「どう生きるか、何のために学ぶのか」（テキストはインターネットでコピーできる。私の事務所の人達も読み出した）、第3~5週「知の技法：知識を獲得するための知識、創造的なミーティングの仕方、自己表現とインタビュー技法、対話における自己発見」となっている。その他に「フィールドワーク」や中谷巖学長の“愉快！経済学”もある。

「フィールドワーク」では、10人ほどのグループで、多摩市周辺を歩き回って、自分で見たり、地域の人聞いたりして、問題を見つけ・解決を考え、提案をつくることをやっている。大学の講義というと、毎年同じことを教室でしゃべるだけということが多いと言われているが、フィールドワークを1年次に経験するというのはいいことだと思った。大半の学生が卒業後、企業に入ることから考えても、この「若衆宿的」カリキュラムは面白い。もちろん自立して商売（ビジネス）を始める人も、研究者になる人にとっても役に立つプログラムである。

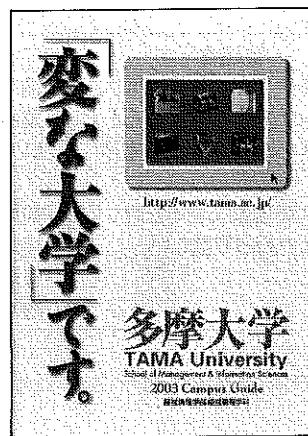
●多摩大学は「変な大学」ですという経営方針

私は、大学の入学とかその後の就職とかにかかる人生から遠く離れてしまっていて、今のPR時代ならこんなものかと思っていたが、当所の若い人たちは「これは面白い」と言ってパンフレットを褒めた。「変な大学です」という大学案内は好評だった（写真）。A4版のこのパンフには

「多摩大学はなぜ『変な大学』なのか」の説明が6項目にわたって載っている。それは、①私立大学一なのに、徹底した「少人数による手づくり教育」をめざしています、②4年制大学一なのに、最初の授業は「自己発見」で始まります、③経営情報学部一なのに、毎朝の「英語シャワー」で使える英語が身につきます、④大学一なのに、教授の半数以上が「産業界で活躍している」人たちです、⑤現役学生一なのに「起業している」人がいます、⑥文系大学一なのに、「NHKロボットコンテスト」で特別賞をとりました。

これらを見ていて経営方針がはっきりしていることがよくわかる。ついで「この大学の経営者は誰なんですか」と聞いてしまった。多摩大学は学校法人田村学園グループの大学であるが、この経営方針は理事長の田村邦彦、野田一夫初代学長、中村秀一郎二代学長の3人の合作で、それを中谷巖現学長が発展させておられるようだ。野田一夫先生については、宮城大学学長として一度話をうかがっている。そのとき「この先生はマネジメントに意欲をもっておられるな」と感じた。大学の先生で、そんな気分が感じられる人はまずいない。

新しい中谷学長のパンフレットにも、①授業は商品、②意欲のない学生は不要、③知識プラス生



「変な」多摩大学のパンフレット

き方、④ITと英語、⑤起業学精神、⑥ビジネスインターンシップと社会人向け夜間大学院一が強調されている。

いろいろ見てきたが、ここで感じたことは、今後の大学は、「9割の学生を社会へつなぐ教育と1割の研究」ということになり、学生を社会へつなぐ「若衆宿」の機能をもたない大学はユーザー（親と学生）から見離されるかもしれないということだった。したがって大学の教員（先生と職員）は、「生き方」を伝える知的サービスを提供することに、習熟しなければならないのだと思う。

(いとのり さだよし)

管理者の立場も考えた、公営住宅の植栽計画、管理計画

山田 龍雄

昨年度、大分県と鹿児島県のある市町村で公営住宅建替えの基本設計と実施設計を行った。大分県の場合は、一昨年からの基本設計の継続による実施設計である。

基本設計は、大きくは建物本体と建物廻りの外構との2つに分けられ、さらに外構計画のひとつとして植栽計画を立案する。

この植栽計画についての基本的な考え方、あるいは前提条件について担当者に尋ねたところ、大分県と鹿児島県の両担当者とも、「極力、植栽は必要最小限でいいです。あの管理が大変なのです」という同じ回答であった。最近、建設されている公営住宅の中には、高さ2~3m程度の中木が住棟廻りに数本しか植栽しておらず、本当に夏場の日よけもできず、環境面でも潤いのないものがみられる。これは、管理の手間をできるだけ省

きたいといった事業者や入居者自身の意向があるようだ。設計する側は、できるだけ潤いのある団地、あるいは環境面に配慮した団地づくりの手段として住棟廻りに植栽をしたいという思いがある。しかし、事業者側の意見を聞くと、その大変さも理解できる。

《事業者側の意見》

- ・10年数年前にモデル団地として、住棟廻りに生け垣をするなど、かなり頑張って木々を植えたのだが、居住者は手入れしてくれなく、管理の手間もかかり、お金もかかる。
- ・駐車場に高木を植えておくと鳥の糞が落ちてきて、居住者から苦情がくる。駐車場には高木は植えないで欲しい。
- ・広葉樹を植えておくと、落ち葉が側溝に入り、掃除に手間がかかる。

表 植栽管理の立場別意向

	管理者	入居者	設計者
主な意見	<ul style="list-style-type: none"> ・管理費や手間、あるいは入居者との苦情等を考えると必要最小限の植栽として欲しい ・低木の管理はできるだけ入居者で行って欲しい。 	<ul style="list-style-type: none"> (植栽を肯定する意見) ・菜園コーナーを設置して欲しい ・プライバシー保護のため住戸前に植栽して欲しい (植栽を反対する意見) ・管理が大変なので必要最小限でよいなど 	<ul style="list-style-type: none"> ・できるだけ潤いのある団地にしたい ・地表面温度を下げるなど、環境面の配慮で植栽したい ・道路に面したところなどはプライバシー保護のため植栽したい

・草むしりが大変なので、できるだけアスファルト舗装にして欲しい。
 ・桜を植えると毛虫がつくので、桜を植えないで欲しい。
 ・最近の団地では団地の自治会のまとまりも弱くなっているので、住民だけの管理では限界がある。
 事業者以外に入居者、設計者の3者の立場別の意見をまとめたものが上表である。

従って、当初から、これらの立場別の意見に配慮した植栽計画を立てておくことが重要となる。

ある県営のモデル団地で、あまりにも立派な生け垣をしたために、あの管理ができなくなったりというような話もある。

●メリハリをつけた植栽計画が必要

公営住宅の植栽管理では、一般に高木の剪定や消毒などの危険の伴う管理、あるいは木が大きくなりすぎて電線に接触している、隣接民地境界を越えているなどの場合は、事業者が対応することとなっている。問題なのが居住者管理となっている生け垣など、低木の管理や住棟周辺の空き地等に生える雑草の草むしりである。そこで、必要以上に居住者の管理を期待しなく、事業者側の管理や入居者の立場も考え、少し割り切って、メリハリをつけた植栽計画を工夫する必要がある。大分県のある自治体の場合では、事業者と話し合いの結果、次のような植栽計画を行った。

- ・団地全体及び住棟の玄関口などシンボルとなる場所や公園の廻りに高木を植えた。
 - ・住棟の1階前庭のスペースの一部を菜園コーナーとした。当初から居住者の中で菜園やガーデニングが好きな方に植栽を行ってもらう。
 - ・住棟北側面は管理者側の立場を考え、砂利敷きとし、管理の手間がかからないようにした。
- (設計の立場からすると、日照が少なくてもよ

い低木等の植栽もしたかった)
 ・道路に面した住棟南側は、プライバシーや騒音対策の観点から低木を植える。(これは管理者側からは、植栽しなくともよいとの意見もあつたが、道路に面したところであることから何とか納得していただいた)

今回の計画では、入居者の環境整備や管理に対する意向について、直接聞くことができなかつた。しかし、入居者の方の管理面での問題等を共有していくためにはワークショップ等によって、いろいろな意見を吸い上げ、その問題を解決していくようなことを事業者と一緒に仕掛けていくことも大切である。

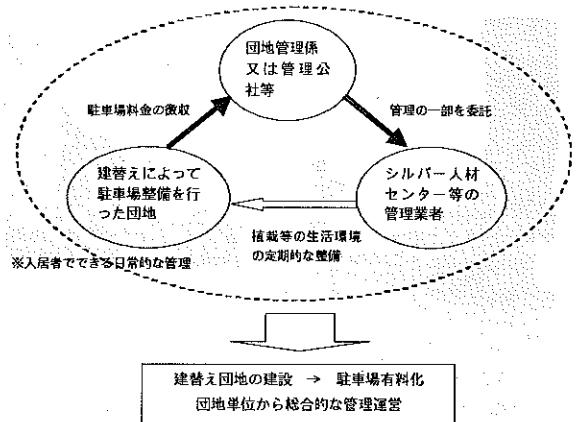
●公営住宅の植栽管理は、基本的に居住者まかせであり、管理システムがない

同じ賃貸集合住宅の植栽でも、その違いが顕著にみられる都市整備公団(旧住宅公団)と公営住宅とについて少し考えてみる。

都市整備公団の住宅団地をみると、住棟廻りの生け垣をはじめ、かなり密度の高い植栽をしている。これは都市整備公団の住宅の場合は、管理費を別に徴収をしており、清掃及び植栽管理については、団地サービス業者に委託するようなシステムができている。

一方、公営住宅の場合は、低所得者の住宅ということもあり、清掃や植栽(危険を伴う高木の剪定や消毒等は除く)は自主管理が原則となっており、家賃以外に清掃や植栽管理の費用を徴収していない。この管理費を確保できるかどうかが、植栽計画に大きな相違をもたらしているようである。

以上のような点を考えると、公営住宅においては、その地域性に合った植栽計画と管理との折り合いがつくような設計と、その管理システムの工夫が必要である。



●日常の管理を行うための財源を駐車料金から活用できないか

共働き世帯、高齢者単身世帯などライフスタイルが異なる世帯同士が入っている集合住宅では、「全員早起きをして草むしりや清掃をしようよ」言つても限界がある。特に最近の公営住宅では、若い世帯が自治会に入らず、定期的な清掃活動等に参加しないといった問題もあるようだ。そこで、団地によっては定期的な清掃などで事情があつて出てこられない場合には、負担金制度を設けているところもある。

このような最近の入居者のライフスタイルや意

向を考えると、低木などを日常的に管理していくためには、昔のように、すべて自主管理というシステムでは難しくなってきている。しかしながら、環境整備の管理を部分的に委託するとしても、その財源をどこから確保するかが問題である。そこで、次のような提案を行いたい。

管理費の財源として駐車場料金の一部を活用できないかと思う。これまでの公営住宅の駐車場費は無料のところがほとんどである。しかし、公営住宅といつても自家用車所有者が増えている状況であること、駐車場の保管場所の届け出が必要であることなどから、最近の公営住宅建設では、できるだけ駐車場整備費という補助制度（1/3補助）を活用し、かつ駐車料金を徴収するように指導されている。このことから、建替え等を契機として駐車場料金を徴収し、その一部を植栽管理にあてるようにしてはどうであろうか。また、委託先としてシルバー人材センターなどを活用することで高齢者の働き場創出にもつながる。このためには自治体毎で条例等を制定し、そのルールづくりを行う必要があるが、これから建替え事業は各地で進められるため、その管理システムを考える時期に来ていると思う。（やまだたつお）

21世紀の大学教育は国際人材育成 ～立命館アジア太平洋大学の取り組み～

山辺 真一

●これまでになかったキャンパスの風景

2000年4月に大分県別府市に開学した「立命館アジア太平洋大学」は、「アジア太平洋学部」、「アジア太平洋マネジメント学部」の2つの学部から成り、1学年800名、4年生まで揃って3200名の規模の新設大学である。平成14年度に行った調査で大学を訪問する機会があり、これまでになかった大学という印象を受けたので紹介したい。

何が印象的だったのかを一言で言うと、日本人だけでなく、日本人以外の学生がキャンパスの中にたくさんいたということである。設立前から海外留学生を学生数の半分入学させるという情報は出ていたが、ご存じのようにどこかの大学では入学者数を確保するために、中国留学生を大量に入れて失敗したという新聞記事が出て、この大学も

同じことをするのかと思っていた。しかし、話を聞いて全く違うことが分かった。

●中韓台からの留学生は半分にする

アジア太平洋地域からの留学生は全体の半分、2002年10月時点で全学生1902人のうち留学生は904人である。このうち中国・台湾・韓国は431人で、留学生の50%以内に制限するという方針であった。大学を訪問した日がたまたまオリエンテーリングの日であったためと思うが、日中台以外と分かる多彩な人種の若者たちがいた。国際人養成という国の大規模な大学教育における大方針はあるものの、実際にそういう教育環境を実現し、日常的に異文化に触れ、知ることができる場は日本の中では皆無に近く、日本人学生の国際感覚を養うというコンセプトをまさに具体化した大学である。

●通常の留学生の受入とは違う

もう一つの特徴は、英語による講義が広く採用されていることである。そのため外国籍教官も50%の比率で採用されているが、留学生にとって英語の講義が最初から受講できるということは、從

来日本の大學生に必要だった日本語の研修期間が必要なくなったということである。このことは、所得格差があるため半年から1年近い日本語研修の準備期間が負担となっていた留学生にとっても、大学に入学して徐々に日本語を学べる、さらに同世代の若者と日常的に交わりながら覚えられるということで、留学生にとっても、日本の学生にとっても魅力的な環境であり刺激になる。

●1科目が1万8千円

留学生を受入れるため、4月、10月の2回入学式があり、セメスター制によって2期に分けられている。また、アメリカなどで行われている「単位制授業料」が採用され、1単位の受講に18千円を支払う。これは、国内ではほとんど行われていないが、単位を取得することへの日本人学生の意識改革に大きく役立っている。さらに学生だけではなく、日本人教官にとっても良い刺激となり、講義での様々な工夫など、ひと味違う講義となっている。しかし、最終の試験だけで単位が取得できるという訳でもなく、試験は50%、講義が50%という成績評価システムも取り入れられている。学生は日々の学習に追われ、休暇以外にアルバイトをする時間もないため、試験が終わると、蜘蛛の子を散らすようにキャンパスで見かけなくなるそうだ。

●長い目で見ると

この大学が立地するために、大分県と別府市、地元の誘致活動、設立支援には相当の投資があったことは容易に想像できる。全体で約300億円の投資があったと言われている。また、各国からの留学生を確保、受け入れるためにも、留学生奨学制度のための基金、海外への宣伝活動、そのための人的ネットワークづくりなど、それらのコストも含めると、もっとお金がかかっているはずである。

しかし、毎年800人の卒業生がこの大学で得た国内外の人々のネットワークを持って、アジア太平洋地域、さらに世界に散らばっていくということは、日本にとってあるいは各國にとっても、「人脈」という大きな財産を得ることになり、費用対効果などでは到底測れないものではないだろうか。

●日本のイメージは別府から

別府市に立地が決定してから、大学開設の準備



立命館アジア太平洋大学キャンパス中央の風景

と並行して、市内でAPU講座という公開講座などの地域連携活動も当然行われている。大学の人的資源を活用して地域でこんなことができるようになるという宣伝も兼ねたものである。さらに開学後は、別府市だけでなく、自治体との交流協定や教官の地元講座への派遣など様々な交流も実施されている。ユニークなのは、多数の留学生が日本を知る場として、短期のホームステイ制度が取り入れられ、同世代だけではなく、多世代の人々の交流も行われていることである。

ちなみに、留学生がこの大学に来る最大の理由は日本の経済的発展、企業発展などのプロセス、マネジメントを学ぶことであり、自国の発展のために彼らは勉強をしにきており、この姿勢は日本人学生にとっても大きな刺激となっているはずである。

(やまべ しんいち)

狭苦しい宅地開発はなぜできる

伊藤 聰

●容積率・建ぺい率

既存集落や住宅団地等で、ここは広々として余裕があるな、あるいはぎゅうぎゅうで狭苦しいな、といったそれぞれの住環境に対する印象を持つことがある。ひとつは道路の幅によるが、もうひとつは建物の建て詰まりの状況による。建物の状況を数字に置き換えると、「容積率」「建ぺい率」というデータで表すことができる。容積率とは、敷地面積に対する建物の延べ床面積（各階の床面積の合計）の割合、建ぺい率とは敷地面積に対する建築面積（建物が建っている部分の面積。いわゆる「建て坪」）の割合のことである。

容積率が高いと、その土地は高度利用されてい

るということになるが、住宅地においてはたいてい階数が高くなる。建ぺい率が高いと敷地に余裕がなく、空地等があまりない状態となる。基本的に、建ぺい率が100%を超えることはないし、実際に80%をこえることもまれである。

●都市計画区域に入っているかどうか

都市計画区域内であれば、容積率・建ぺい率に規制がある。用途地域がかかっているところ（主に市街地、または市街化したい地域）では、種類によって制限が決められており、低層住居専用の地域（開発団地など）であれば容積率60%/建ぺい率40%（以下60/40の様に書く）など、その他の一般の住居地域や工業地域などでは200/60、商業地域では400/80などとなっている。都市計画区域内でも用途地域がかかっていないところ、いわゆる白地地域では、規制値は現行400/70となっているが、平成12年の法改正によりこれより低い規制値を設定できることとなっている。

ところが、都市計画区域に入っていない地域では、これらの規制値はない。日照時間は何時間以上確保といった日影規制もない。それらをチェックや指導するシステムがない。

いいかえると、都市計画区域に入っている地域では、敷地に対して一定以上の大きさの建物は建てられないが、都市計画区域に入っていない地域では敷地内でどんなものでも建てられるということである。

都市計画区域外で開発圧力の高い地域では、宅地開発された場合どのような状態になっているか、実例を挙げて見ることにする。

●庭もあまり取れない戸建て住宅

図1は福岡都市圏のある市の都市計画区域外で昭和50年代に開発された戸建て住宅団地の状況である。敷地面積はおよそ150～200m²（50～60坪程度）、団地内道路は幅員4m程度は確保している。

この地域の容積率・建ぺい率をみると（図2）、容積率では50～60%が高く平均で54%、建ぺい率では30～40%が高く平均39%程度である。他の市の都市計画区域内で行われた比較的良好な開発団地では、敷地面積は250～330m²（80～100坪程度）、容積率は平均42%、建ぺい率は平均34%程度であった。

この都市計画区域外の団地では、敷地が狭いことも大きいが、建ぺい率の割に隣の家との空間が



図1 狹い宅地開発が行われている（航空写真より）

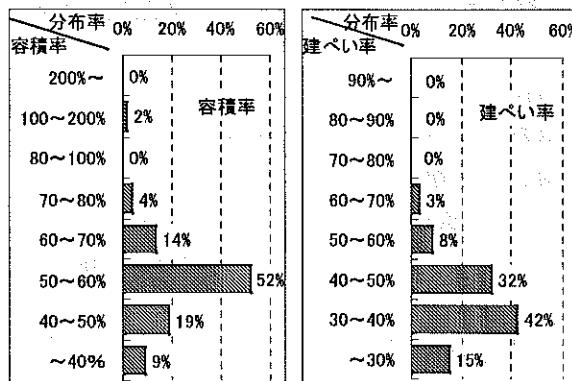


図2 都市計画区域外開発団地の容積率・建ぺい率

狭く、またほとんどが床面積を確保するために2階建てとするため、建て詰まり感、つまり窮屈な感じを受ける（もちろん、漁村のような建て詰まり感とは違う）。

駐車場は確保し、門やアプローチも付けるため、庭らしいスペースはほとんどとれていません。緑化は家によっては努力が見られるが、かえって暗くなったりしている。物置をおいたり、ちょっと増築したりすれば、もういっぱいだ。

●安く売れたが、将来は不良資産化も

なぜこういった宅地開発が起こるかといえば、結局は需要と価格の関係である。開発に規制のない都市計画区域外としては、おそらく福岡都市圏で最も利便性が高い所と思われる。この場所で50坪の宅地だと、30坪の住宅も入れて1,500万円程度で戸建てが買えてしまう。同じ市内の25坪の分譲マンションより安い。

ところで、この地域の事情として、ミカン園の問題があった。既存農家は丘陵地でミカン栽培をしていたが、昭和50年代、ミカン需要は落ち込み農家は成り立たなくなっていた。その頃、都市圏

の住宅需要は高まり、周辺市町村の宅地化が急激に進んでいた。そこで、土地を売ってでも収入が欲しい農家と、手頃な宅地を販売したい不動産業者の利害が一致し、狭い宅地が大量に発生することになったのである。

ただ、ここ数年、このような宅地の需要は全体的な開発圧力の低下もあり、収まりつつある。福岡市の人団も数年後には減少に転じると予測されている。市では遅ればせながら都市計画区域内（＝市街化調整区域）への編入を計画しているが、今度は規制が厳しくなるため、将来の建替や転売に支障をきたす可能性もある。

**自分の住んでいる町を探検しよう
楽しい公園をかんがえよう
～玖珠町こどもわーくしょっぷ～**

愛甲 美帆

小中学生が春休み中の3月下旬、玖珠町森地区で自分たちの住んでいる町を探検し普段遊んでいる町の隠れた魅力を知ったり、新しくつくる公園のアイデアを考えようと、森地区に住む小学生を中心にワークショップが行われた。

よかネットNo.61号でも紹介したが、大分県玖珠町は口演童話で有名な久留島武彦氏の生誕の地であることから「童話の里」としてまちづくりに取り組んでいる。久留島氏は江戸時代久留島藩の旧森町を治め、城下町を形成した久留島家の末裔である。森地区には、明治初期から戦前の町並みが残っておりその活性化の一つとして、今度2つの蔵が残っている場所に公園をつくることになり、子ども達にもアイデアを出してもらおうとなった。

●いつもは入れない蔵に入れるよ。町並み探検。

当日はあいにくの小雨だったが、子ども会を中心幼稚園児から新中学1年生、「森新聞社」と銘打ったミニ新聞を発行している高校生など総勢30人が会場である「わらべの館」に集まった。イメージがわきやすいようにと公園の模型を用意していたが、興味をもったのは幼稚園児のみであった。「外を歩いた後、粘土細工や蔵の活用を考えるよ。」と話しかけると「ふうん」とそっけなかったり、「えーっ」と驚く子もいて、子ども達が興味をもって楽しめるようにと準備をしたのだが

その場合、地区計画などで部分的な緩和策を設けることはできるが、既存の農村集落などに比べ、代々住んでたわけではないので子どもが後を引き継ぐ必然性は薄いし、良好な住環境でなければ中古では流通しない可能性もある。宅地を広げることも、道路を広げることも困難だ。ただし、安く割合利便性はよいという魅力は残る。

基本的なことではあるが、都市計画はいろんな兆候を基に将来を予測しながら立てなければならず、後手に回っては大変なことになると感じさせられる事例であった。

(いとう さとし)

少し不安になった。

まずは、普段住んでいる町を探検。町民に武彦先生と親しまれている久留島武彦氏のお墓がある安楽寺をお参りした。近くにいた女の子に聞くと「初めて来ました」と言っていた。昔この辺りの家の屋根は竹瓦だったそうで、その竹瓦を再現しているお店が、ちょうどこの数日後にふきかえるということで、準備をした竹瓦をみて説明を受けた。それから公園の対象地にある蔵の中を見た。

蔵の中には仕掛けがあった。扉には一見重厚な鍵がかかっているのだが、それは偽物で鍵穴は扉の取手を開いた中にあるのだ。この仕掛けがおもしろいので子ども達に「工夫して開けてごらん」と言うと、男の子達が俄然やる気になって悪戯苦闘し出した。結局、鍵は開かず種明かしをしたのだが、今度は扉が開かない。みんなで押したり引いたり体当たりしながら扉を動かし、やっと中に入れた。待っている間、窓の格子の隙間から中をのぞくだけで待ちくたびれていたので、皆大喜び。高さが8m、床面積が36.0m²の2階建ての蔵の中

<当日のスケジュール>

○町並み探検

- ・久留島武彦先生のお墓を見る
- ・竹瓦を見る
- ・水路を見る
- ・公園対象地を見る
- ・蔵の中に入ってるみる

○おやつ

○村松先生のお話—森の歴史

- 公園づくりワークショップ
 - ・粘土で公園におくおきものをつくろう
 - ・蔵の活用を考えよう

○発表会

には、もともと親戚などが集まる時に使う特別な皿などがしまってある。大きな瓶や食器類があつたが、現在は使われていないので、ほこりをかぶっていた。明かりといえば窓の格子の隙間から漏れる光と懐中電灯が頼りで、特に1階部分は暗かった。中には「怖い」という子どももいたがそれよりも普段はとても入れない蔵に入れるという好奇心が勝ったようで、怖い怖いと言いながら交代で蔵に入ったり、恐る恐る瓶を覗いたりしていた。

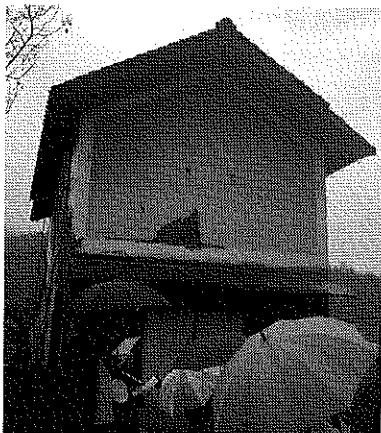
●何ができるかな。公園づくりワークショップ。

探検後、森地区の歴史やこれまで見てきた建物について大分県の歴史や建築に詳しい村松幸彦先生のお話があり、いよいよ幼稚園から新小学5年生は粘土でおきものづくり、新中学1年生と高校生は蔵の活用を考えることになった。

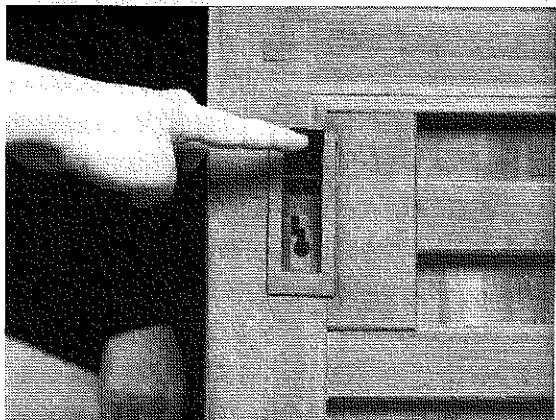
私は粘土班だった。「公園にあつたらいいと思う“おきもの”をつくろう」といつても、子ども達がどんな反応をするか心配だったがそれは大きく外れた。用意された紙粘土に加え、いろんな色のビー玉や石・ストロー・爪楊枝などで創作意欲がわいたのか皆楽しそうに作っていた。

子どもの視点というのは本当におもしろい。幼稚園の女の子は花びらがついた花を3個つくりそれを重ねて上からギュウギュウ押している。「なんで押しているの?」と聞くと「一つ目の花が無くなってしまって次があるんだよ」と教えてくれた。つぶしているのではなくて、一つがなくなつてもまた楽しめる工夫なのだ。また、ギザギザに切った粘土の上に三角錐をたくさん並べている小学5年男の子がいて、これ何だと思うと聞かれたので「うーん。ひまわり?」と答えると「違う。鬼を上からみたところ。」と分かってないなという顔をされてしまった。子ども達の作品の中には童話の里が意識されたものが多くあったが、上からみたところから作り始めるなんて私には想像もできず、恐れ入ってしまった。他にも葉の形をしたかわいいベンチ、小鳥、池がある涼しい庭などができた。

「蔵の活用」は3班に分かれてアイデアを考えた。A班は、2階づくりの蔵を3層にして中をアスレチックにしようというもの。名付けて「蜘蛛の巣蔵」(略してクモクラ)。いかにも子どもらしいと思うが、一方で「クーラーや床暖房、エレベーターを設置する」という意見もきちんと盛り



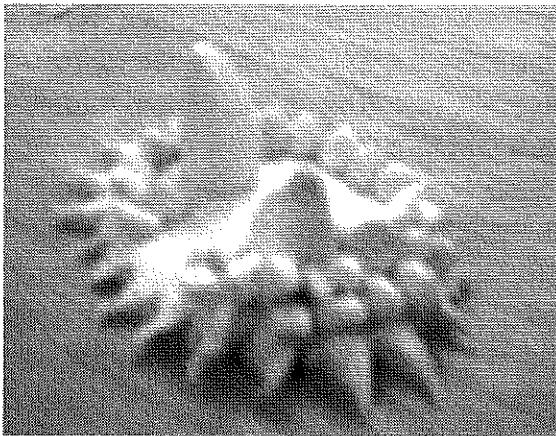
公園予定地に残っている蔵



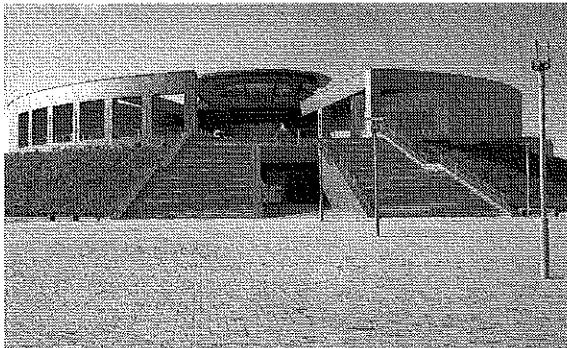
本当の鍵穴はここにある



ワークショップの様子



鬼の頭を上からみたというおきものデザイン



もっとお客様を増やしたい石炭産業科学館（パンフレットより）機や豊坑などをみると、石炭産業が明治、大正、昭和の30年代まで日本のエネルギー、産業の基盤となっていたこと、あるいは当時の技術者の熱意みたいなものが、実感として伝わってくる。

●なかなか充実している石炭産業科学館

まず始めに大牟田市の全般的な石炭の歴史と近代化への歩みを勉強しようということで、石炭産業科学館の館長さんから約1時間ほど説明していただいた。

施設内には400mのところにある有明海海底の採炭場まで一気にエレベーターで下るような仕掛けがあり、実際に採掘していた最新式の採掘マシンが動き、ダイナミックな採掘現場を体感できる。

しかし、この施設は、大牟田市活性化の一大事業として取り組み、破綻したネイブルランドと一体的なものとして建設されたため、西鉄大牟田駅の東側埋立て地の東端、駅から約2kmと離れている。また、周辺は荒涼とした埋立て未利用地が広がり、現在はバスも通っていないということもあって、年間利用者は1万5千人という。（ネイブルランド開設時の年間利用者は10万人）これも大牟田市や周辺市町村の小・中学生の見学旅行が多いということであるから、一般のお客さんは半分も来ていないのではないかと思われる。

結構お金もかけて、中身も充実している施設ではあるが、お客様が少ないというのは非常にもったいない。大牟田市の近代化遺産の見学と併せて、何かお客様を少しでも増やしていく工夫を、市職員や住民の人たちと一緒にになって検討していくことができないかと思う。

イギリスのウェールズにある炭鉱博物館での体験をしてきた当社の所員に聞くと、そこでは炭坑夫の格好をしたおじさんが案内してくれ、実際に坑道まで降りて本物の坑道を体験でき、また坑道



周辺住民が管理している宮内駅（三池専用鉄道玉名支線）の一部を改造してバーチャル型のトロッコ（その場で激しく揺れて、映像で走っているような気分になる）に乗ることもできるような楽しい仕掛けがあるそうだ。大牟田の石炭資料館も、イギリスまでいかなくても、もっと楽しいエンターテインメントな仕掛けや、一部でも実物のものを見せるというような工夫があつても良いのではないかと思った。（イギリスの炭鉱博物館の話は「よかネット42号」掲載）

●懐かしい駅舎跡の佇まい

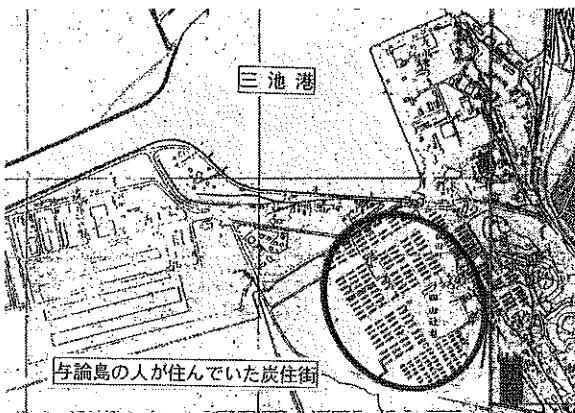
地図からわかるように、主な炭坑は市街地の周辺にあって、そこで採掘した石炭を三池港まで輸送するため、あるいは従業員の通勤手段として、三池炭鉱鉄道が明治24年（七浦～横須）から明治38年（三池港まで延長）までに市街地を取り囲むような形で敷設している。

この専用鉄道は、昭和59年9月に玉名支線（原田駅～平井駅4.1km）と従業員を対象として行っていた旅客輸送を廃止したとされている。したがって、廃止になって20年近く駅のホームがそのままの状態で所々に残っており、今でもお客様を待っているかのようにひっそりと佇んでいる。何とももの悲しい思いがつのるが、筑豊炭田全盛期に育った私にとってはどこかなつかしい風景でもある。

この駅の一つである「宮内（くない）駅」では、周辺住民の方々が愛着と思い入れがあるためか、清掃管理を行っており、雑草もなく非常にきれいになっていた。道路を挟んで向かい側が広場なので、駅ホームを舞台にしたカラオケ大会や演芸会が十分できるのではないかと思った。

●与州会館とは？

見学するときに、用意していただいた荒尾市と大牟田市を合わせた地図を見ていると、文化財専



三池港近くにまとまった形成されている与論の人たちだけの炭住街

門員の山田さんが、「この地図の三池港南側に、まとまった炭住街があります。ここは与論島から来て炭鉱で働いていた人の炭住街です。」ということを教えてくれた。そこで、何で与論島からわざわざ三池炭鉱まで来たのかを聞くと「明治時代に与論島に台風が来て、このとき家屋等の財産をなくした人たちが炭鉱に稼ぎに来ていたらしいが、それ以上の詳しいことはわからない」とのことであつた。炭鉱の地には全国から職をもとめて人が集まってきたというけれど、与論島から来ていたというのは驚きである。

与論島の人たちの炭鉱作業の賃金は、通常の人より安価であったらしく、このためにも隔離した炭住街を形成していたのではないかとの説明があつた。これも炭鉱の歴史の“負”的部分の一つである。この与論島の人たちの話し合いや集いの場として、炭鉱住宅の一つを集会所として改造した建物と「与州会館」という看板が、今でも住宅地の中にひっそりと佇んでいる。今はかなり朽ち果てているが、これも炭鉱の貴重な遺産であり、なんとか保存・活用できないかと思う。

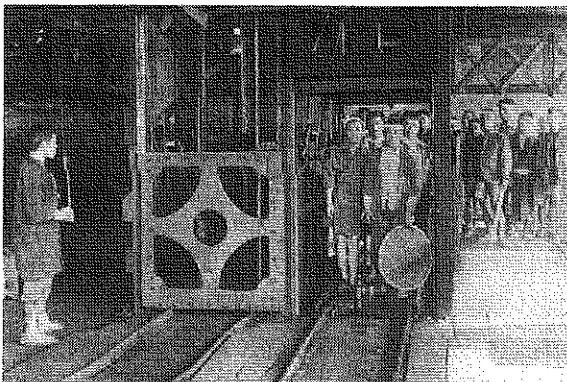
●石炭隆盛時代の偉大さを伝える万田坑

万田坑は、わが国で唯一炭鉱施設として重要文化財に指定されたものである。直径が2m以上あろうかと思われる巻揚機、コンクリートで埋められていない第1堅坑口は深さ273mあり、堅坑口の上には鉄製のネットが被されているだけで、上に立つと足がすくむ。

パンフレットによると、万田坑では明治35年に第1堅坑に英國製の巻揚機が設置されたと記されており、以後、平成9年まで約100年近く稼働している。また、明治40年頃の写真を見ると、堅



かなり朽ち果てている与州会館の建物



巻揚機と当時の炭坑夫(パンフレットより)

坑から炭坑夫が下に降りるためのゲージ横に並んでいる炭坑夫たちは、設備は近代化されているのに比べて、服装が法被に袴姿というアンバランスな雰囲気になっており、産業近代化に追いついていない日常の暮らしがかいま見えて面白い。

また、万田坑では、現在、会員約80名の「ファン俱楽部」が結成され、清掃活動や万田坑を使ったコンサート、撮影大会、炭坑の歴史を語る会などのイベントなどを行っている。

先にも述べたが、今回の見学では、すさまじい勢いで近代化していった明治という時代を炭鉱遺産から体感でき、非常に面白いものであった。これは、詳しい方の説明があったからこそ、感動できたのだと思う。

他の人に炭坑見学を奨めるとしても、詳しい説明があることが必要だろう。このような見学コースを組むとしても、やはり炭坑の歴史などに詳しく近代化遺産ガイドみたいなことが出来る人を、いつでもリクエストできるようなシステムがあった方がいいと思う。

そうすれば、明治という時代に興味のある方や他の炭鉱町で暮らしたことのある人などは、大半

田近代化遺産を体感してみたいと思うのではない
だろうか。 (やまだ たつお)

田園居住を実現するためのしくみづくりを 考える

本田 正明

●田園楽住の会がついにスタート!

よかネット61号で呼びかけた「田園楽住の会」の初会合をアクロス福岡の久留米大学サテライトオフィスで行った。西日本新聞でも取り上げてもらったおかげで、東京から移り移り住みたいと考えている人や糸島の海岸近くにあるぼろ小屋を半年かけて改造し田園暮らしを実践している人など23名が集まった。

会の主な議論は以下のようのことだった。

- ・空いた農家を借りたいけれども都市住民には情報が出てこない
- ・農家は、土地を売ることよりも貸すことの方が抵抗があるので、定期借地権はなじみにくいのではないか
- ・土地利用を農地のままで開発するのは難しく、地区計画などの都市計画をもっと考えることが必要になる
- ・農家の人のつきあいを増やして、信頼を得られる人に土地を貸してもらうというようなことができないか
- ・田園楽住に参加してみたいという農家と、仲間として付き合うことをやってみよう

私は当初、居住希望会員はなかなか集まらないのではないかと思っていたが、「田園暮らしをしていても、周りに知り合いがおらず寂しいので軒ぐらいで集まつた暮らしがしたい」などといった思いのある人が多く集まっていたので、非常にうれしかった。会員たちのつながりで、居住希望会員を100人に増やそうということになったが、すぐにでも集まりそうな感じがする。

ただ、実現に向けて一番問題になってくるのが、やはり農家の人にどう参加してもらうかということである。福岡都市圏にある志摩町のある地区では、田園居住のイメージを「高級住宅地ができるのではないか」、「そうすれば廃棄物を埋め立てた土地が売れるのではないか」といった変な期待感だけが高まってしまっている。

今後はそういった人たちともいつしょに議論をして、田園居住はそんなに儲かる話ではないが、いろんな人とつながりもできて豊かな地域づくりにつながるよ、といったことを理解してもらい、それでも興味があるなら会に参加してもらうといったことをやっていく必要があると思う。

●どうやったら長続きする里山づくりができるか

田園居住では、人とのつながりや家づくり、畠などの菜園・庭づくりなどに关心を持つ人が多いが、もう一つの要素として荒れたミカン畠などを里山としてどうやって保全していくかということも、田園居住を考える上で大きなテーマになっている。

家づくりや畠づくりなどは田園楽住の会や建築家や農家のサポートで個人個人がなんとか実現できるのではないかと思う。しかし、里山保全や管理となると自分の借りる土地だけでなく周辺地域と一体となった環境づくりが必要であり、そうなると組織的な活動がいるようになる。

だが、その里山保全の活動を行うにしても、どういったところから活動資金を得るかについてはなかなかイメージできない。これから市町村の経済状況が厳しくなる中、補助金に頼るような活動では、なかなか続かないのではないかと思う。

里山づくりは10年、20年といった長い時間がかかるもので、活動は細々でも“続けていくこと”に意味があると思う。ただ、里山を再生することによるメリットが一体なんなのか、そのメリットを誰が受けるのかといったことがわかりにくい。自分が田園居住をしたとして、そういった活動に資金を出して里山の管理を誰かにお願いするか、といわれれば悩んでしまう。できる範囲で里山保全や管理を自分でやってみたい、でもお金を払ってまで頼む程でもないな、というのが本音である。そこで里山保全や管理を教えてくれるようなところはないかといろいろ探してみた。

●里山づくりの活動は増えている

里山づくりにつながるような活動はいろいろなところに生まれつつあるようだ。

久留米では造園などの生産業者が毎月1回、平日の夜に集まって、全国的に森林再生活動をしている人を講師に招いて自然配植技能者養成講座なるものを開いている。これまでのように工業型で、大量生産的で地域性のない苗木をつくったりする

のではなく、地域の気候や土地の条件にあった植栽を生産者から提案していくようなことをやっていこうとしている。

九州大学が移転する西区元岡の新キャンパスでも、緑あふれる豊かな環境を創ろうと学生たちがNPOを立ち上げている。森林資源の保全活動も楽しみながら行わないと長続きしないと、除伐した竹を使って笛づくりをしてみたり、ネイチャーゲームを行ったりしている。ただ、どちらの活動も始まったばかりで、活動資金を助成金に頼らざるを得ないなど、課題は多いようである。

そんな中、ある本で「好きなことをして、そこそこ儲けて、いい里山をつくる」というおもしろいキャッチコピーで活動をしている「里山俱楽部」というNPOを見つけたので、どんな活動をしているか話を聞きに行ってみた。

このNPOは、関西都市圏に住む人を中心に250人ぐらいが参加していて、大阪府の南河内町をフィールドに里山づくりのための講座や米づくりといった農業の講座など、26もの事業を展開している。おもしろいのは、その事業のうちNPOが直接関わっているのは「里山の学校」という基礎講座だけで、それ以外の25の事業は里山の学校の卒業生たちが起こして、独自採算で運営を行っていることである。「里山の学校」という場を通じて、里山づくりのリーダーが生まれているのである。講座の受講料もそれぞれでまちまちだが、「里山の学校」は年6回開催で年間通し受講で37,000円である。けっこうな値段だと思うのだが、都市部の人で40歳よりも若い人たちがよく集まってるそうである。

●田園居住の予備校みたいなものができるないか

田園楽住の会は、できるだけ若い人も参加できるようなプランにしたいという思いがある。今のところ私が26歳で最年少の会員なのだが、田園居住の実現に向けて、気がかりなことは、私のような世代は生まれた頃から団地暮らしで、農業に関する世間常識を知らなかったり、農業も体験したことがないので、道具の使い方も知らないということである。

できれば里山俱楽部のようなところで、田園居住のための最低限の知識と技能を学べたらいいのになあと思ってしまった。逆に里山俱楽部の事務局をしている大塚さんに田園楽住のパンフを見せ

里山の学校	
里林飯	里山の自然と暮らす知恵を、四季を通じた体験で学ぶことができます。
森林ゼミ	雑木林と人工林における里山管理作業の実践的な学習と体験ができます。
里山の穴	
びびびラボ	炭材の伐採から炭の販売まで炭焼き師の必須技術を得ることができます。
(バーベキュー/グリルコース)	プログラムの企画・進行の手法を学んであなたもファシリテーターに!
里山を加厚の活動	
森林ボランティアチーム もりもり	経験のない人も、自分のペースで、家族みんなで、くぬぎ山を手入れしましょう。
とんびくらぶ	里山の仕事と遊びのおいしいところだけを体験しちゃいましょう!
弘川千年的森	行政・地域・市民の協働により、千年の時をかける夢のある森づくりを進めています。
タントンハン	米づくりを中心に農業の基本をじっくりと習得することができます。
森のキッチン	焚き火を囲んでおしゃべりして、森の料理やクラフトを楽しめます。
さいゆうき 菜・道・季	摘み葉や伝統野菜の料理、自然素材の工芸などをたっぷり味わえます。
スウェットロッジ セレモニー	ネイティブアメリカンの儀式を通じて自分と自然とのつながりに気づいてゆきます。
かぼちゃ俱楽部 ~有機農業を学ぼう~	久門太郎兵衛さんのお話を中心に、環境・食料・健康などについて自由に話す会です。
ヒミツプロジェクト	
ど組・け組	一定の作業技術をもったメンバーによる、森林作業請け負いチーム
3まんま企画	びびびラボの修了生による、イベントや遊びの企画・運営グループ

里山俱楽部で行われている事業の一部。ファシリテーター育成講座などもある

て、「里山俱楽部の会員はこんな暮らしに興味を持ちますかね」と聞いてみた。するとすぐに「興味持つ人はいっぱいいますよ。会社辞めてまで、田園暮らしをしようとしている人もいますよ。実はうちでもこんなことをやってみたいと思っているんです。」とのことだった。田園居住にあこがれる人と里山づくりなどに興味を持つ人たちは、なにか共通する思いがあるようである。

田園樂住の会は田園居住の事業を行うための会であるが、そのステップに届く前の訓練期間があった方が、若い人は参加しやすいのではないだろうか。ただ、その場合にも訓練を行う“場”が必要になってくる。里山俱楽部では久門さんという自給循環農業を実践している方が“場”を提供してくれているそうだ。やはりそういった理解者を捜していくことが、田園居住の実現に向けた課題になりそうである。誰かこんなことに付き合ってくれそうな農家や地主さんを知っていたら教えてください。

(ほんだ まさあき)

所員近況

**建築家と散髪屋さんは瞬間・竣工式サービス業か
—忘れられない散髪屋さんの話—**

「散髪屋さんと建築家は同業だなあ」とつくづく思ったことがある。もちろん今も、その考えは変わらない。共通点が多いので、それを挙げてみよう。

①どちらも「知的サービス業」である。昔、大阪の淀屋橋だったか、桜橋だったか、渡辺橋だったかのあたりに“頭で刈る頭”という看板を出した散髪屋があった。一度行ってみたいと思っていた。今はあるかどうかわからないが、あれば行ってみたいものだ。

建築家の方は、クライアントの将来の生活の基盤をデザインするのだから、まちがいなしに知的サービス業である。

②自分の知識や腕に自信を持っている点で、双方はよく似ている。散髪屋は自分のイメージしている仕上がりパターンに客の頭を当てはめていくように思える。私のように格好のよくない顔や頭の人間は、散髪屋に行く度に憂鬱になる。

建築家も、街のたたずまいや周辺の家などとの調和よりも、自分のイメージしている家の形を、敷地に押しつけようとしているように思える。これらは、ともに自信の表れであろう。

③3つ目の共通点は、双方とも“竣工式にこだわる”ということである。本当はこのことを伝えたかったのである。建築家は、周辺の風景やたたずまいとは関係なしに、その建物が竣工式当日に「いかに見栄えがいいか」にこだわる。竣工の次の日に雨漏りがしてあまり気にしない。それはデザインという知的サービスとは関係がないのだろう。散髪屋さんが一番力を入れるのは、「ハイ終わりました」という瞬間である。たとえば、竣工の直前に頭にくしを入れて、少しはみだして髪などがあると、パラッとタオルをかけて、少し長いような髪をハサミでチョキチョキと切り落とす。あの恐怖の瞬間、私などは背中のあたりが引きつるような、ゾクゾクするような思いにとらわれる。1～2本の髪が首すじに入るともう落ち着かない。あわててトイレに入ってシャツ下着まで脱いで髪を落とすはめになる。あれほど丁寧に、髪を櫛で

分けてくれても、次の日に、同じ筋でわかるということができない私などにとっては、意味がないのだが。

実は昔から考えていることがある。あの分ける筋を2～3cmの幅で2～3回くしを入れて、どの場合でもおさまるようにしておけば、竣工後（翌日の朝）も、毎朝散髪屋さんの撻に合わせる苦労がいらないと思う。

これが瞬間サービス業だという意味だ。しかし、一度だけ「長持ちサービス業」の散髪屋さんに出会ったことがある。

東京の永田町のあたりで時間が1時間余りあいてしまったことがあり、ついつい地下の散髪屋さんに入っていた。地下鉄永田町を上った有名な砂防ビルの近くのことである。そこで頭を刈ってもらっているときに、40代ぐらいの男が入ってきた。そして散髪をしてもらうわけでもなく、そこにいた同年輩ぐらいの男に声をかけた。「昨日タケシタさんが来られたようですね。」といって、しばらくして「何かいっておられたかな……」というような感じのことをいった。当時「竹下」という首相経験者がいて、辞職後1年程度の頃のことだったと思う。「なるほど、ここはそういうところなんだな」と思って聞いていた。

そして私の散髪が終わってお代を払うときに、60代ぐらいの私の頭を刈っていてくれた主人が「分けるところは、それでもいいように調整してありますから」というようなことを言った。私は驚いて「エッ！」といったが、瞬間にこの主人の言ったこと、やった仕事のことがわかった。つまり「長く続く知的サービス」をしてくれたのである。次の日から頭を洗って櫛を入れるとき、髪の毛の分け目に気を使わなくてもいいので、気分がよかったです。

もちろん「続くサービス業」をやっている建築家もたくさん知っている。しかしそうでない人も多いように思う。

なぜそうなったのかを考えると、建築家も散髪屋も規格品大量生産工業の時代の影響を受けて、規格型サービス大量生産を追求することになったのではないかと思う。だから、あらかじめ考えているパターンで、仕事を進めてしまいたいと思うのだろう。今時「床屋政談」（散髪をしてもらうでもないのにたむろしていて、政治のことをあれ

これしやべりあうこと)などという言葉も聞かない。

実は去年の秋にその散髪屋さんを探しに行った。昔入っていた3階建くらいの小さいビルは消えてしまっていて、大きい立派なビルがあった。その地下に散髪屋さんはあったが、私に“一言”いつてくれた老主人は見あたらなかった。私はそのまま帰ってきた。

(糸乘 貞喜)

■ 沖縄で飲んだ不思議なお茶～ふくふく茶～

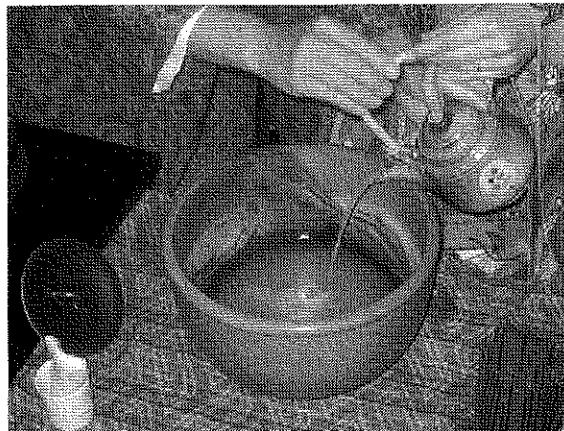
以前から大好きな着物を着てお茶をたてることができたらいいな、と思っており、とりあえず行動に移そうと、4月から茶道教室に通い始めた。

「今年こそは茶道教室に行く」と、年初めに会社で公言していたこともあってか、「お茶を習おうと思っているのであれば、沖縄にふくふく茶の先生に会いに行くから一緒にどう?」と、所員の尾崎が声をかけてくれた。

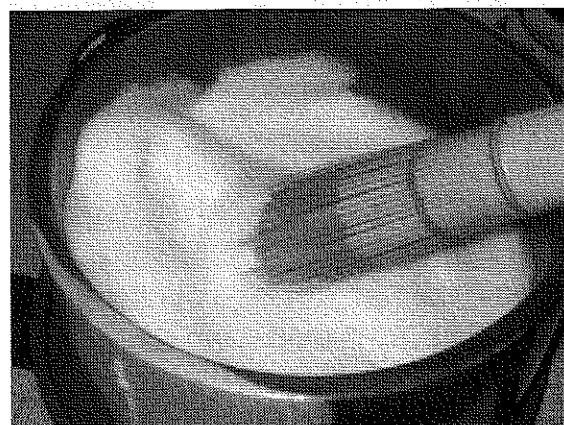
ふくふく茶に関する本を読んでみると、「大きな木鉢に煎り米湯と茶湯を入れ、大きな茶せんで泡立てる。茶碗に小豆ご飯小さじ一杯くらいと煎り米湯を注ぎ、その上に茶せんですくった泡をソフトクリームのようにこんもりと盛る。泡の上には刻んだ落花生をふりかける」とあった。茶せんですくえるくらいの泡が立つのは、使用する水が沖縄の地下水であり、その水の硬度が高いということが大きなポイントで、水の硬度が低ければ、決して泡立つことはないそうだ。本の写真を見ながら、「お茶を飲む」というよりは「泡を食べる」という感じなのかな、というイメージを持った。

ふくふく茶についてお話を下さったのは、NPO法人琉球の茶道ふくふく茶あけしの会・理事長の田中千恵子先生。先生はふくふく茶について約25年研究をされており、平成4年にあけしの会を設立した。先人が残した文化遺産であるふくふく茶を今後も残していくたい、また、ふくふく茶を通して世界の人たちと仲間づくりをしたいということで、平成12年にNPO法人を設立している。

早速、先生にふくふく茶をたてていただいた。木鉢には煎ったお米の煮汁にお茶を混ぜたものを入れた。茶せんで泡立て始めると、あっという間に木鉢が泡でいっぱいになってきた。泡が立つの



木鉢に煎り米湯と茶湯を入れる



茶せんでかき混ぜると、あっという間に木鉢が泡でいっぱいになった

にしばらく時間がかかるのではないかと思っていたので、こんなに簡単に泡が立つものなのかと正直驚いた。先生の家に伺った4人が、交代で泡立てを体験。泡立てすぎたためか、少し泡が硬くなってしまった。

茶碗には煎った玄米の煮汁を入れる。その上に茶せんで泡を盛った。茶せんで泡をすくい、軽く茶せんをたたいて茶碗に落とす。煮汁の上にふわっとのった泡は本当にソフトクリームのよう。最後に刻んだ落花生をふってできあがりである。

ふつうのお茶は一人分ずつ、茶碗に抹茶を入れ、湯を注ぎお茶をたてるが、ふくふく茶は大きな木鉢で何人分もの泡を立ててから茶碗に盛り分ける。お茶といえどもこのように違いがあり、ふくふく茶への興味をさらにかき立てられた。

お茶菓子と一緒にふくふく茶をいただいた。泡の中から玄米のいい香りがしてくる。玄米の煮汁の量が多かったこと也有ると思うが、「泡を食べる」というよりも、「煮汁と一緒に泡を飲み込む」といった感じであった。前日宿泊した宿の

女将さんにふくふく茶を飲みに行くといつたら、「あまりおいしいものではない」と言われていたのだが、すっきりした味のお茶であった。

琉球装束をまとい、実際に道具を使ってお茶をたてる体験もさせてもらった。先生に指導していただきながら、最初から順を追ってたてていく。お茶をたてたときに泡ができ、その泡を茶碗に盛る以外の部分は、通っている茶道教室でみている（通い始めたばかりなので私自身はまだお茶をたてたことがないが）手順とそう大きくは変わらない気がした。

田中先生はふくふく茶の教室をされている他、要請に応じて高校などに出向いてふくふく茶を教えたりしている。ご自身の教室で教えている生徒の中には、小学生くらいのお子さんもいるそうである。

自分がお茶を習い始めたことがきっかけになって、沖縄の伝統文化のひとつに触れることができたのはうれしい誤算だった。作法通りにきちんとたてることはなかなか難しいとは思うが、自分でもちょっとたててみようかな、と思っている。

（梶原 里香）

■都市住宅学会九州支部の設立準備会が発足

日本の住宅事情は、戸当たりの面積も増えてかなり改善してきたとはいえ、特に都市の住宅事情はまだまだ様々な問題を抱えている。例えば、借地借家法の問題、都心の空洞化の問題、マンションの管理問題あるいは建替問題などである。

都市住宅・都市居住の問題について、これまで建築、住居、都市計画、法律、経済、福祉、政治など様々な分野で研究されてきたものを総合的に研究することを目的として、「(社)都市住宅学会」が10年ほど前に設立された。

学会の活動内容としては、論文の募集・審査やシンポジウムの開催、機関誌の発行、受託調査、功労者の表彰などを行っている。

「(社)都市住宅学会」は現在、本部のほかに関東支部、関西支部、中国・四国支部の3つがあつたが、今回九州大学の竹下輝和教授（都市・建築学）を中心として、九州支部を設立することとなり、4月12日に支部設立準備総会が行われる。九州支部は九州・沖縄各県を地域として、大学や行政機関、民間等が現在のメンバーとして名を連ねている。

九州支部の当面の活動は、機関誌の発行と名簿の整理を基礎とした人的ネットワークの確立、九州地方の課題把握と関連する講演会等の実施、新規会員の増強となっているが、要は『まずはひと集めとカネ集め』ということの様であった。

当日、記念講演として、千葉大学法学部教授で（社）都市住宅学会会長の丸山英気氏に「都市居住について～法的視点から～」と題してお話しをいただいた。法律の話なので難しい面もあったが、少し紹介したい。

- ・マンション建設で起こった日照問題は、建築基準法にあったものを作れば問題ないのかという話で、このような場合、合法であっても司法の場に持ち込まれることになる。裁判所は、被害者は我慢の限界を超えているか（受忍限度）、加害者は回避できたかどうか等で判断をした。
- ・瑕疵担保責任については、マンションは不具合を発見してから1年以内となっているが、宅建法では引き渡しから2年以内とされている。ところが、売れ残りの物件があった場合、引き渡しから2年とはいつなのか、はっきりしていない。マンションにおける瑕疵とは何かもはっきりしない。建築裁判は医療裁判と並んでややこしくなっている。
- ・マンションの管理は、日本では管理組合によって行われるのが普通になっているが、独仏等に学んで作った昭和37年の区分所有法では、プロの「管理者」が管理することを想定しており、組合の理事長が「管理者」になることは想定していなかった。素人が管理者になっていることが、大規模修繕の問題、積立滞納者の問題、賃貸化の問題などに対処できない原因になっている。プロに頼んで、お金で解決する仕組みがあるてもいいのではないか。

九州支部設立は急に動き出した話で、今年の秋（11月）に九州で学会の全国大会を開くこともすでに決定している。秋の全国大会のときには、また報告したいと思う。

（伊藤 聰）



この本は、九大のS先生から「おもしろいよ」と紹介されて読んだ本であり、本当におもしろかったので紹介したい。

本書は、プロダクト・デザインの世界では相当に有名な会社（小生は知らなかったが）である「IDEO」の企業文化を会社の内側から紹介している。目次をみるとまるで、最近本屋に並んでいる「こうすれば会社は変わる」とか、「イノベーションはこうしておこせる」とか、理念的なこと、マネジメントの方法を抽象的に書いているその辺の本と一緒にかなと思っていた。

しかし、中を読んでいくと、全くそういう理論・理屈ではなく、IDEOが取り組んできたデザイン開発をはじめとした様々な事例をベースにして、イノベーションのプロセス、その現場・雰囲気が随所に描かれている。

とくにブレインストーミングとプロトタイプ制作の持つ重要性については、デザインに関わっている人たちだけでなく、つねに新しい発想を求める人、クリエイティブな仕事をしている人たちにとっては非常に参考になるし、日頃の仕事ぶりを反省する材料にもなるのではないだろうか。参考までに、「ブレインストーミングを台無しにする6つの落とし穴」にかかっているのは、

1. 上司が最初に発言する（さあ考えてくれという発言に心当たりは？）
2. 全員にかならず順番がまわってくる（参加する義務にしてしまいがち）
3. エキスパート以外立入禁止（素人はだめという先入観）
4. 社外で行う（気分を変えて、よくあるケース）
5. ばかげたものを否定する（常識しか要らなければやる意味は無い）
6. すべてを書きとめる（記録にエネルギー

■発想する会社！

早川書房
トム・ケリー&
ジョナサン・リット
マン

が吸い取られる）

であり、ブレインストーミングを無駄に終わらせないための禁止事項と書いてある。思い当たる事項が結構ある。インスピレーション、発想の原点、目的を取り違えてはいけないということであろう。本書は全体に常に「遊び心」を持ち続けること、つまり「やってみる」「つくってみる」とか失敗を恐れないで、その失敗から何を学ぶか、そして前進することの大切さが随所に語られている。

(山辺 真一)

第11回よかネットパーティー開催場所

人と人との交流の場、「人もうけ交流会」下記の場所にて開催いたします。皆様のご参加をお待ちしております。



日時：平成15年5月10日（土）13:00～15:30

場所：警固神社境内 中央棟
(福岡市中央区天神)

編集後記

記事にも書きましたが、田園樂住の会についてスタートすることができました。いつの日かここで、「住み始めました！」と報告出来る日をすでに夢見ています。（ほ）

よかネット No. 63 2003. 5

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0001 福岡市中央区天神1-15-35 ホンダハピエ5F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-5231

名古屋事務所

TEL 052-265-2401

(株)地域計画・名古屋